

飛び出せ地域へ —フリーマーケットで相談会やっちゃいました— Occupational therapists community service —A report of consultations in free market—

○窪田有里菜 (OT)¹⁾, 中村圭一 (OT)²⁾, 望月真里那 (OT)³⁾, 望月康宏 (OT)³⁾

¹⁾自宅, ²⁾健康科学大学, ³⁾甲州リハビリテーション病院

Key words: 地域支援, 閉じこもり, ニーズ

【はじめに】

山梨県作業療法士会地域リハビリテーション委員会閉じこもり研究会（以下閉じ研）は、地域における高齢者や障害者の閉じこもりについて2009年8月より活動してきた。その中で、実は私たち作業療法士（以下OTR）が所属する組織や業務、領域や制度の枠にとらわれ、地域住民への支援が難しいという閉じこもり状態に陥っていることに気づいた。まずはOTR自身が閉じこもりから脱却し、地域住民と直接話してニーズを知ることができないかと考え相談会を行った。

【相談会の目的】

OTRが地域住民の生活における心身の困りごとについて相談を受け、OTRを身近に感じてもらい、OTRが地域における資源の一つとして活用できることを明らかにする。

【相談会の方法】

毎月第3日曜日に甲府駅北口で行われるフリーマーケットのブースを借りて相談会を開催する。当日は横断幕や幟、作業療法のポスターを掲示し、パンフレットなどを配布する。約8人のOTRが二人一組になりアンケート（心や体で困っていることがあるか、身近に相談できる相手はいるか、作業療法を知っているか等）への協力を呼びかけ、また、廃用症候群・閉じこもり症候群に関係する簡易評価用紙（運動・嚥下・認知の機能、うつ・閉じこもり・低栄養の状態）をテーブルに置いて、OTRがより具体的な介護予防に関する情報提供と相談支援ができるようにする。実施期間は平成26年8月～平成27年9月。

【結果】

上記期間に相談会を4回開催、相談件数は144件、アンケートをきっかけに相談者は健康や生活について話をしてくれた。回収したアンケート98件によると、相談相手がいると答えたのは84%、そのうち専門職が46%で中でも医師が22%と最も多かった。また、作業療法を知っていると答えた人が50%であり、その多くは名称のみであった。以下OTRが応じた相談の一例である。

A氏は市の保健師が訪問チェックに来て、身体機能に問題なしと判断して帰ったという。しかしA氏は家族関係に問題を抱えており、自分の居場所がないことを訴えたかった。相談により妻とのドライブが気分転換になっていることが分かり、その活動の継続を提案した。

B氏は無料相談実施中の幟をみて自ら相談に来た。職場で孤立しており周囲に話を聞いてもらえる人がいないという。話を聞くだけで笑顔を取り戻し、その後パチンコへと出かけて行った。

C氏はよく眠れないと訴えた。首や肩の痛み、精神的ストレス等について相談し、気晴らしの機会がないことに気づいた。最近遠ざかっていた趣味活動をまたしてみようと言ってその場を離れた。

【考察】

日本作業療法士協会は2008年に作業療法5か年戦略、2013年に第二次作業療法5か年戦略を策定して身近な地域にOTRを配置すべく取り組んでいる。しかし、それでもOTRの相談支援の場は医療や福祉施設がほとんどであり、地域住民は作業療法について知らない。アンケートから相談相手はいるが、その多くは医師と答えたことから、病気についての相談はできるが生活の困りごととは相談し難いことが推測された。今回、フリーマーケットで相談会を実施したことで相談窓口を知らない人や、相談窓口に行くほどでもないが問題を抱えている人たちに出会えた。そして、生活の困りごとやニーズを聞くことができ、OTの専門性を活かして、生活課題に焦点を当て、趣味活動の継続や気分転換の方法を助言することができた。また、フリーマーケットにおいて、作業療法について掲示や配布で広報することができ、さらに相談会で具体的な助言ができたことで作業療法を地域住民に伝えることができた。これこそが第二次作業療法5か年戦略の展開を補強するものであり、私たちが目指していた閉じこもりからの脱却である。